

# 木琴デイズ

—平岡養一「天衣無縫の音楽人生」

通崎睦美 著

木琴奏者として、日本とアメリカで一世を風靡した平岡養一（1907〜81）の本格的な評伝である。著者・通崎睦美は京都在住のマリンバ奏者。平岡が遺した木琴で演奏した偶然をきっかけに、その愛器にほれ込み、譲り受けた。本書には、以後、木琴奏者としてもユニークな活動をつづける演奏家の視点が貫かれている。

まず、経験を重ねて変化していく平岡の演奏の音楽的特徴が、彼の波乱の人生とあわせて分かりやすく詳述されている。また、大ざっぱに混同されがちな、ルーツの異なる二つの楽器、木琴とマリンバの歴史と日本における受容史、これも読み応えがある。木琴からマリンバに推移していく音楽状況を俯瞰するなかで、木琴を一途に愛した音楽

## 波乱の演奏家人生と楽器の受容史

つうざき・むつみ 67年生まれ。『天使突抜一丁目』『通崎好み』ほか。

家・平岡の姿に、人間・平岡のエピソードも交えながら光をあてるといふ趣向である。

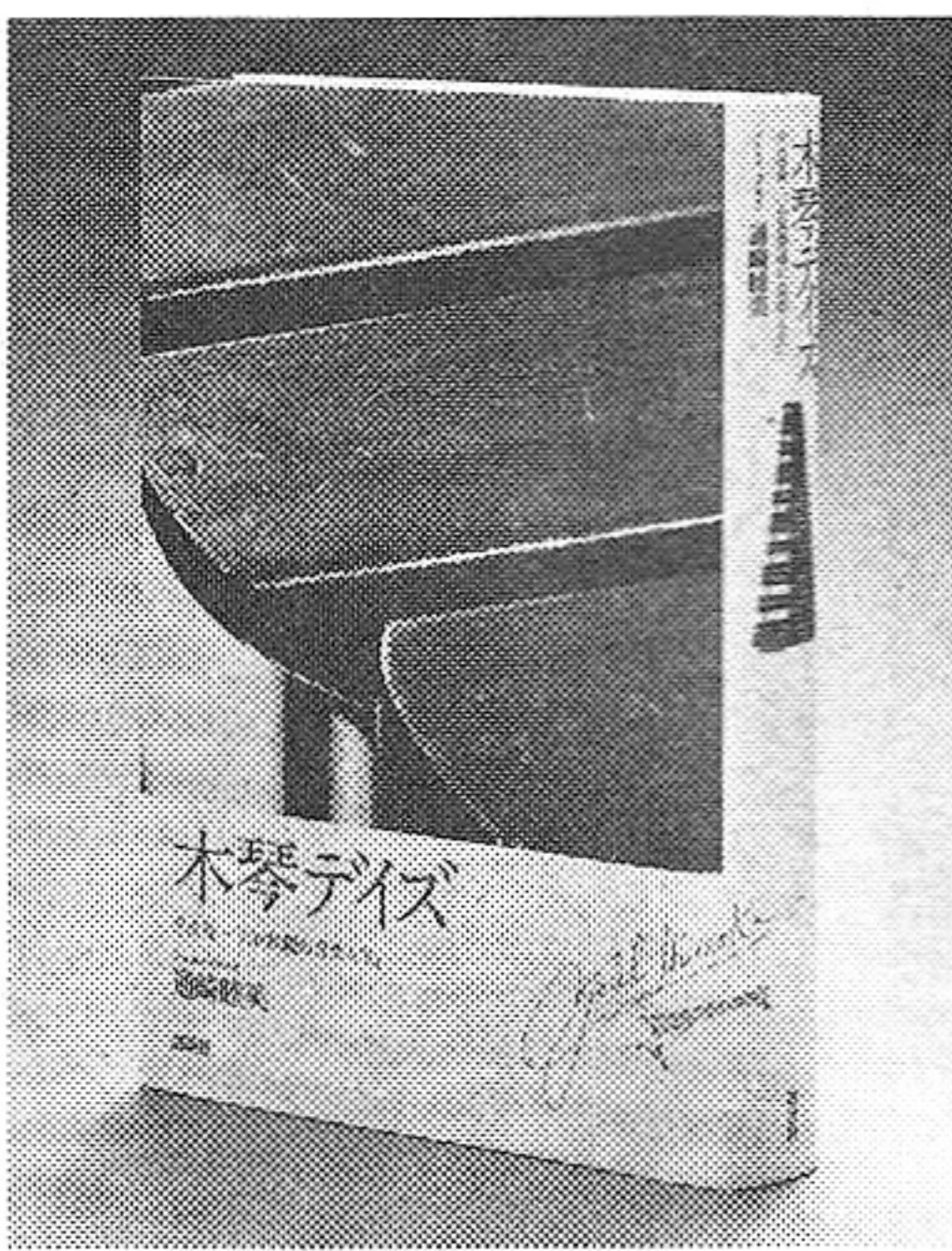
義理の叔父に劇作家・小山内薫がいたり、同業者としてのよきライバル朝吹英一とその周辺についての詳述など、芋づる式に明らかになる関連人脈の傍系記述も楽しい。

ただ、戦時下の平岡の演奏活動を、藤田嗣治や猪熊弦一郎の戦争画とともに高く評価している点には異議がある。

藤田、猪熊はもとより、平岡もまた、その芸術活動と名声を軍部に利用され、人間の生存を脅かす侵略戦争に協力してしまった。そこを掘り下げずに、「描きたい」「弾きたい」という心に忠実なだけの「純粹」で「一途」な芸術家として、戦時下の彼らを肯定していることには賛同できない。

この国が再び危険な冬の時代に向かいつつある現今、その意味をあらためて深く考えずにはいられないのだ。

評者 池田逸子 音楽評論家



講談社 1900円